

コロナ禍における、済生会中津病院訪問看護ステーションの対応

今西裕子¹ 友行淳子²

大阪府済生会中津病院 訪問看護ステーション 施設長代理¹ 所長²

令和3年2月医療従事者に対するワクチン接種が開始され、近隣訪問看護ステーションが接種時期未定の中、当ステーションは中津病院スタッフ同様、4月までに2回接種を終えることができた。このことは後に北区でただ一つ、地域の診療所からCOVID-19陽性者の訪問看護ができるステーションの立ち位置を作ることになる。(当時在宅事業所は第3次接種の枠で接種開始が決まっていなかった)

同年4月中旬、COVID-19に感染した80代女性が搬送先困難で自宅待機となり、診療所医師から訪問看護による点滴を依頼したいと連絡を受けた。医師によると地域の訪問看護ステーションは何れも受け入れ不可能とのことであった。大阪市はコロナ第4波の影響を受けて、病院やホテル療養が困難になった入院待機者が在宅に溢れていた時期である。病院同様、中津病院訪問看護ステーションが受けるしかないと判断し、対応時間は15分、健康観察、服薬や点滴等を目的とした訪問を開始することにした。この後、急増する自宅療養者の療養のため、北区医師会、北区大淀薬剤師会、医療介護コーディネーターと連携し、5月よりCOVID-19への訪問システムを構築し、受け入れを開始した。利用者の中には待機中に酸素飽和度が80代まで低下し、在宅でリザーバマスクを使用して一日に数回訪問したケースもあった。職員からは訪問開始時に不安の声もあったが、病院では、すでにコロナ病床で看護師が対応をしていたこと、中津病院医師への相談等支援を受けて実施に踏み切った。開始は管理者、2件目はスタッフと同行訪問、その後は「次は〇〇さんやね。」と職員間で声を掛け合うようになった。訪問依頼は常に緊急であるため、同行訪問や順番を調整し、通常の訪問を行いながら迅速な対応に努めた。今やCOVID-19の訪問は他の利用者と区別なく受けているが、開始当時はワクチンの効果や治療も過渡期であり、未経験の感染症の状況判断を考えると、スタッフの不安はいかばかりであったかと推察する。

コロナ陽性者の訪問は、第4波では、訪問依頼5件で訪問延回数16回(体調確認、点滴注射、在宅酸素など)。第5波では、訪問依頼10件、延回数23回(体調確認、点滴注射、服薬・吸入確認、排泄ケア、介護相談など)であった。第6波では、同様の内容を訪問依頼16件、延回数45回であった。通所デイ、入所施設でクラスターが発生し介護難民となった高齢の自宅療養者に対して2度訪問をして介護を実施したケースもあった。緊急入院をサポートしたが、死亡に至ったケースはなかった。令和4年6月現在も依頼があり訪問を継続している。また、大阪府のコロナ健康観察事業に令和3年8月に登録し、北区相談窓口ステーションとして現在も対応している。以上の活動に近隣医師会から評価を受けたこと、また在宅で、不安な思いで療養する利用者からの感謝は訪問看護の価値を改めて知る機会となった。さらに、病院では当然であるチーム医療も地域ではまだ未調整であり、ZOOM会議等によって診療所医師、調剤薬局、各医師会、薬剤師会、病院医師、看護師、病院薬剤師等の関係者との意見交換とシステム構築は今後の感染、災害などへの準備として貴重な経験となった。



受付：令和4年7月7日